

オランダ商館長の江戸参府と鞆の浦

矢田 純子

はじめに

鞆の浦は瀬戸内海のほぼ中央、現在の広島県福山市南部、沼隈半島の先端に位置する。付近一帯が鞆の浦（以前は鞆、鞆津）と呼ばれ、景勝の地として知られている。古くから潮待ち、風待ちの港として多くの船が行きかい、近世においては福山藩の領内産物を積み出すなど物資の集散地として繁栄した港町であった。また、朝鮮通信使や琉球使節、オランダ商館長一行が江戸との往復の際に、寄港した町の一つであった。

鞆と外国人使節に関する研究は、『福山市史』⁽¹⁾において朝鮮通信使、琉球使節、オランダ商館長一行それぞれについて概略が述べられている。また、福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会による「朝鮮通信使と福山藩・鞆の津」や、同館での琉球使節やオランダ商館長江戸参府の特別展の展示や図録においても、各使節の鞆滞在について詳細な研究がなされている⁽²⁾。

本稿では安永三年（1774）と文政九年（1826）の江戸参府におけるオランダ商館長一行の鞆の浦滞在を取り上げる。特に文政九年の鞆への寄港は、同地で酒屋を営んでいた中村家に伝えられた「中村家日記」に詳しく述べられ、また商館長に随行したシーボルトの記録も有名である。そのため、これらを素材とした研究が存在するものの、商館長一行が来港した事実やシーボルトの行動が重視されるにとどまっている。そこで以下では、それぞれの史料を再検討し、オランダ人から見た港町、鞆の浦から見たオランダ人について明らかにする

とともに、寄港一件から浮かび上がる鞆の町の構造について論点を提示していくことにする。

以下ではまず、朝鮮通信使や琉球使節、オランダ商館長一行のそれぞれの使節について触れたうえで、オランダ商館長江戸参府の際の鞆の記録を紹介する。そして、安永三年と文政九年の商館長一行の鞆の浦滞在を検討していく。

なお、日付について、西暦、和暦双方が出てくるため、原則として史料の記述に基づいて、後に括弧で対照年月日を記した。西暦を示す場合は算用数字を、和暦の場合には漢数字を用いることにする。

第1章 鞆の浦と外国人使節

(1) 朝鮮通信使

朝鮮通信使は朝鮮国王が修好や慶賀の名目で派遣され、江戸時代には慶長十二年（1607）から文化八年（1811）まで計12回派遣され、江戸での聘礼は明和元年（1764）が最後である⁽³⁾。通信使は漢城（ソウル）、釜山を経て、対馬に渡り、相ノ島、下関、上関、下蒲刈、鞆、牛窓、室津、兵庫、大坂、京都、彦根、大垣、名古屋、静岡、箱根、江戸、日光で、復路はその反対の経路をたどり、期間は8ヶ月から1年に及ぶものであった。

通信使一行は400-500人の人数で構成されており、正徳元年（1711）の例をみると正使・副使・従事各1名、上々官3名、製述官1名、上判事3人、上官32名、次官13名、中官160名、下官260名の合計475名、これに案内役や対馬宗氏一行が

加わり、相当な規模であったことが窺える。

接待役は福山藩が務めていたが、寛延元年（1748）は藩主阿部正福が大坂城代を務めていたため、宇和島藩主伊達大膳大夫が接待の任にあたった。また、宝暦十三年（1763）には藩主阿部正右が京都所司代の職にあったことから、豊後国岡藩中川修理大夫が接待役を仰せつかっている。

朝鮮通信使の鞆の浦における宿所は絶景の地に建つ福禅寺の東側にある客殿で、福山藩主水野勝種が元禄三年（1690）に建立したものである。正徳元年（1711）の通信使一行から「日東第一形勝」と評価され、また寛延元年（1748）に正使・洪啓禧が「対潮楼」と命名した。この施設に宿泊したのは正使をはじめ数名のみであり、他の一行は鞆の町内にある寺や商家に宿泊していた⁽⁴⁾。例えば、天和二年（1681）には福禅寺に6名、御茶屋に57名、阿弥陀寺140名、南禅坊20名、東西小屋261名、商家には猫屋、肥後屋、阿波屋、表屋、土佐屋、小代屋、石崎屋、大坂屋など数十名ずつが滞在している。延享五年（1748）の商家への宿割をみると、先の大坂屋、土佐屋、猫屋に加えて、安田屋、吉浜屋、正月屋他13軒に及んでいる。さらに宝暦十三年（1763）には阿弥陀寺を使用したといわれている。

(2) 琉球使節

琉球使節は琉球国王の使者で、幕府の將軍襲職を祝うため（慶賀使）、あるいは琉球国王が襲封したことに感謝の意を示すため（謝恩使）に派遣された⁽⁵⁾。両者とも寛永十一年（1634）を第1回とし、前者は天保十三年（1843）まで、後者は嘉永三年（1850）までそれぞれ10回行われる。慶賀使、謝恩使が同時に派遣されることもあり、江戸時代には18回を数えた。

一行は100人前後で、謝恩使と慶賀使が同時に派遣される際には170人ほどになり、鹿児島藩が送迎にあたり、幕府公船としての取り扱いを受け、天候次第では鞆に寄港していた。寛政二年（1790）

には「十月十三日夜参府之琉球人石井町沖江滞船、薩州問屋猫屋清助方江上陸。尤琉球人壱人病死いたし候二付、翌十四日早朝小松寺江琉球人参詣土葬二取置候。」⁽⁶⁾と、琉球使節の一人が病気のために亡くなり、小松寺に埋葬されている。そして寛政九年（1797）には「二月三日夜琉球人着船。翌四日早朝小松寺江仏参、夫より直二乗舟出帆いたし候」⁽⁷⁾と、墓参りのために鞆へ上陸している。

琉球使節一行の宿所は薩州問屋の猫屋であり、嘉永四年（1851）には正使が中村家別邸朝宗亭に宿泊したとされる。

(3) オランダ商館長一行

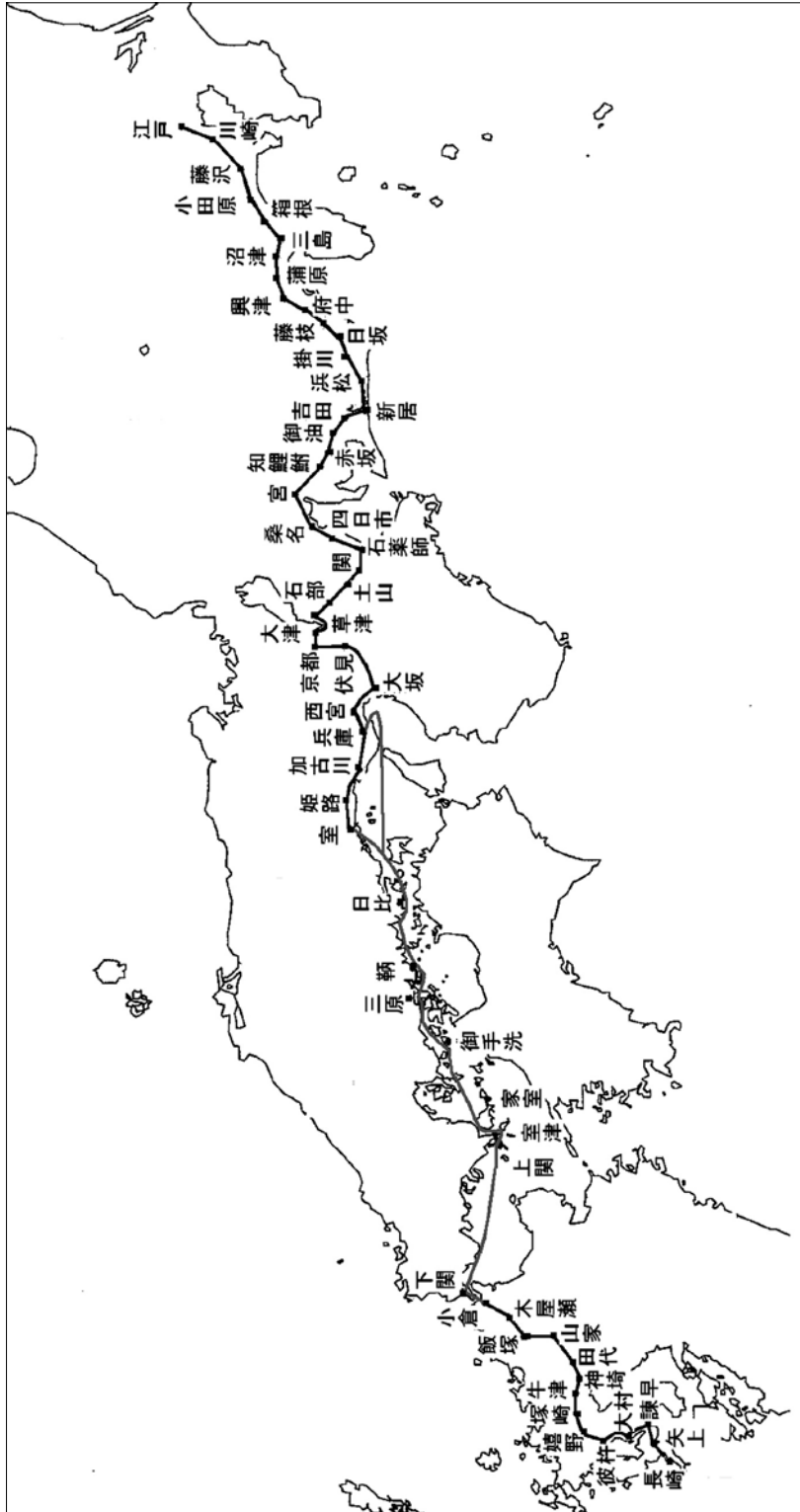
(i) 参府の概要

江戸参府は、オランダ商館長が江戸へ行き將軍に拝謁し、献上品を送ることで、寛永十年（1633）以来恒例となる⁽⁸⁾。寛文元年（1661）以降、旧暦正月に長崎を出発し、三月朔日前後に拝謁するよう改められ、寛政二年（1790）からは4年に1回となり、嘉永三年（1850）が最後の参府となる。

参府の経路を述べると、当初は長崎から平戸を経由し海路下関に向かってだったが、万治二年（1659）以降、長崎から小倉までは陸路となり、小倉から下関、下関から兵庫は海路で、兵庫-大坂から陸路で江戸へ向かっていた。下関から兵庫は順風であると約8日間を要した（【第1図】）。なお経路はその年により多少の変動がある。

参府旅行全体には平均90日前後を要し、江戸には2、3週間滞在していた。旅行の最長記録は以下で取り上げる文政九年（1826）の事例で、商館長スチュルレル一行が143日間をかけて参府旅行を行った。

また、小倉では大坂屋善五郎、下関では伊藤壱之丞、佐甲三郎右衛門（隔年交代）、大坂では長崎屋五郎兵衛、京都で海老屋余右衛門、江戸においては長崎屋源右衛門というように、5つの都市には定宿が存在していた。



【第1図】江戸参府行程図

*年度により若干の変更有り。

(ii) 参府行程

参府の行程を、鞆の滞在（停泊）を確認できる年度4回を取り上げ、【第1表】にまとめた。これを見ると、定宿がある都市（小倉、下関、大坂、京都、江戸）には必ず立ち寄り、下関、大坂、京都には数日間滞在していることがわかる（【第2表】）。その他の場所では休憩や宿泊など最低限の滞在にとどまっている。定宿がない町では予め上陸するところが届けられ、その目的は「寺社并町中見物」とされていたという⁽⁹⁾。

オランダ商館長一行が江戸との往復の際に、鞆の浦に滞在（町に上陸）することは数少ないといえる。たいていは通過しているが、時には投錨して風待ち、潮待ちする様子が見受けられる。江戸参府が恒例となった寛永十年（1633）以降では全167回の参府中、滞在・上陸は数回しか確認できない。

第2章 オランダ商館長の鞆の浦滞在

(1) 参府記録に見る鞆の浦

江戸参府が恒例となる以前を含めて、外国人による記録のなかで鞆に関する記述を挙げると【第3表】の通りとなる。

毎回の参府の記録で鞆が出てくるわけではないが、鞆に滞在した際には多少なりとも触れられており、また上陸せず、通過するだけであっても以下のように記されることもある。

ここで元禄四年（1691）商館長バイテンヘムの参府に随行したケンペルの記録を取り上げることとしたい（傍線は筆者による。以下同）⁽¹⁰⁾。

（前略）間もなく航路からそれほど遠くない左手の、備後の国のゆるやかにのぼる山地を背にした海浜に、有名な鞆の港と町があった。それゆえ、同じ名前の他の場所と区別するために備後の鞆と呼ばれている。湾曲した入江に沿った長い通りには、みすばらしくはない数百の家があり、そのほかにマリウム

（Mariam）すなわち遊郭と二つの美しい寺院がある。ここでは床に敷く大変上質の畳表を産出し、他国に送り出している。この町の後ろの斜面には、清楚な尼寺があり、そこから四分の一ドイツ・マイル行くと、仏を安置した有名な阿武菟観音堂があり、人々はいろいろな病気をなおし、しかも特に船乗りにも順風を恵むすぐれた力を、この仏の御利益だと思っている。それゆえ船乗りや旅客は何枚かの小銭を小さい板の上にとっかりとくくりつけて海中に投げ、彼らがそう呼んでいる阿武菟観音様に、よい風が吹くようにお供え物を贈るのである。こうしたお供え物は、その都度岸に流れ着いて、彼らの願いがかなうのである、とは言っても堂守はそれをもっと確実にするために、風の静かなときに、航行している船のそばに自分の小舟で出かけて行って、観音様のために銭の寄進を頼むのが普通である。この部落の前方や付近にある島や周囲の山地には、藪や樹木が大へんよく生い茂っていた。

これは1691年2月21日（一月二四日）往路での記録である。史料では鞆の南側の港や町並と「阿武菟（阿伏兎）観音堂」について述べられている。これは鞆から西に4kmほど離れた阿伏兎岬の先端に位置する盤台寺の観音堂のことであり、そこからの眺望の良さで知られている（【第2図】参照）。

また、同年4月24日（三月二七日）復路において⁽¹¹⁾、

（前略）白石の西にある鞆に向って漕ぎ進み、西側の石を投げれば届く辺りに船を停めた。この鞆の町は、幾つかの寺のある険しい丘があつて、海からは美しく絵のように見えたが、近づくと娼家や漁師の家や他に粗末な家々があり、取るに足らず、きたならしかった。この鞆の町は東方の海の中に突き出た長い岩山の上にあるので、われわれはそこを回って南

【第1表】江戸参府行程

年度	地名	長崎	矢上	諫早	大村	彼杵	嬉野	塚崎	牛津	神埼	轟木	田代	山家	飯塚	木原瀬	小倉	下関	上関	家室	御手洗	三原	鞆	日比			
1691年 (元禄4年) 商館長バイ テンヘム一 行	往路	0213	→	→	→	0214	→	→	→	→	0215	0216	0216	0216	→	0217	0217	→	→	→	→	→	0221	→		
	備考																									
	初曆	0116				0117					0118	0119	0119	0119		0120	0120							通過	0124	
	復路	0507	←	←	←	0506	←	0505	←	0504	←	←	0503	←	0502	0502	0501	←	←	←	←	←	←	←	0425	
1774年 (安永3年) 商館長フェ イト一行	往路	0225	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	0302	0303	→	→	→	→	→	→	→	
	備考																									
	初曆	0115																0120	0306							
	復路	0629	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	0601	←	←	←	←	←	←	←	0514	
1818年 (文化15・文 政元年) 商館長プロ ムホフ一行	往路	0213		0213	0214	0214	0215	→	0216	0216	→	0217	0217	0218	0218	0219	0220	→	0304	→	→	→	→	→	→	
	備考				昼食	昼食	昼食		昼食	昼食		昼食	昼食	昼食	昼食	昼食	0220	0303	→	0304	→	→	→	→	→	
	初曆	0109		0109	0110	0110	0111		0112	0112		0113	0113	0114	0114	0115	0116		0117						0205	
	復路	0619	←	0618	←	0617	0617	←	0616	←	0615	←	0615	0614	0614	0614	0613	0612	←	←	←	←	←	←	←	0606
1826年 (文政9年) 商館長ス チュルレ一 行	往路	0215		0215	0216	0216	→	0217	0218	0218	→	0219	0220	0220	0221	0222	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
	備考			食事				武備	昼食	寺			昼食	昼食	昼食	0222	0302								0304	
	初曆	0109		0109	0110	0110		0111	0112	0112		0113	0114	0114	0115	0116									0305	
	復路	0707	←	0706	←	0705	←	0704	←	0703	←	0702	←	0701	←	0630	0629	0626	←	←	←	←	←	←	←	0622
1691年 (元禄4年) 商館長バイ テンヘム一 行	往路	0222	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
	備考																									
	初曆	0125		0126																						
	復路	@家島	←	←	0424	←	0419	←	0418	0416	0415	←	←	0414	←	0413	←	←	←	←	←	←	←	←	0412	
1774年 (安永3年) 商館長フェ イト一行	往路	→	→	→	0310	0312				0315	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
	備考									0315																
	初曆				0128	0201				0204																
	復路	←	←	←	0510	←	0505	←	0501	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
1818年 (文化15・文 政元年) 商館長プロ ムホフ一行	往路	0315	0317	→	0318	0318	0319	0322	0322	0323	0327	0327	0328	0328	0329	0329		0330	0330	0331	0331	0401		0402		
	備考				昼食	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食	0327	0327	0328	0328	0329	0329		0330	0330	0331	0331	0401		0402		
	初曆	0209	0211		0212	0212	0213	0216	0216	0217	0221	0222	0222	0223	0223	0223		0224	0224	0225	0225	0226		0227		
	復路	←	←	←	0601	0531	0526	←	←	0518	0517	0517	0516	0516	←	0515	←	←	←	←	0514	0513	←	←		
1826年 (文政9年) 商館長ス チュルレ一 行	往路	0307	0309	0310	0311	0312	0313	→	0317	0318	→	0325	→	0326	→	→	0327	0328	→	→	→	→	→	→	→	
	備考	0309								0325																
	初曆	0129	0201	0202	0203	0204	0205		0209	0210		0217		0218			0219	0220							0221	
	復路	←	←	←	0615	0614	0608	←	←	0601	0531	←	0530	←	0529	←	0528	←	←	←	0527	←	←	←	0526	
1691年 (元禄4年) 商館長バイ テンヘム一 行	往路	→	→	→	0307	0307	→	→	0308	0309	→	→	→	→	→	→	0310	→	0311	→	0312	0312	0312	0313		
	備考				昼食	昼食			0209	0210																
	初曆				0208	0208											0211									
	復路	←	←	←	←	←	←	←	←	0408	←	←	←	←	←	←	0406	←	←	←	←	←	←	0405		
1774年 (安永3年) 商館長フェ イト一行	往路	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→		
	備考																									
	初曆																									
	復路	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←		
1818年 (文化15・文 政元年) 商館長プロ ムホフ一行	往路	0402	→	→	→	→	→	→	→	0405	0406	→	0407	→	0408	→	0409	→	0410	→	0411	→	0412	→		
	備考																									
	初曆	0227								0230	0301			0302		0303		0304		0305				0306		
	復路	0512	←	0512	←	0511	0511	0510	←	0509	←	←	0508	0508	0507	0507	0506	0506	0505	0504	0504	0504	0504	0504		
1826年 (文政9年) 商館長ス チュルレ一 行	往路	0330	→	→	0331	→	→	→	→	0402	0403	0404	0405	0406	→	→	0407	→	0408	→	0409	→	0410	→		
	備考																									
	初曆	0222			0223		0224			0225	0226	0227	0228	0229			0301		0302					0303		
	復路	←	←	←	0525	←	←	0524	←	0524	←	0523	←	0522	←	0521	←	0520	←	0519	←	0519	←	0518		

エンゲルベルト・ケンペル著・斎藤信訳『江戸参府旅行記』平凡社、1977年、日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、雄松堂出版、1996年、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著・斎藤信訳『江戸参府紀行』平凡社、1967年、東京大学史料編纂所写真帳7598-2-62、7598-7-28・29、7598-75-43・44をもとに作成。

【第2表】各都市での滞在日数（日）

年度	往・復	小倉	下関	鞆	大坂	京都	江戸	備考
1691	往	1	3	1	5	3	24	
	復	1	1	1	?	3		
1774	往	1	4	1	?	5	19	鞆で遭難
	復	?	1	6	6	1		
1818	往	1	12	1	4	5	23	
	復	1	1	?	6	8		
1826	往	1	9	1	2	8	39	
	復	1	1	2	7	7		

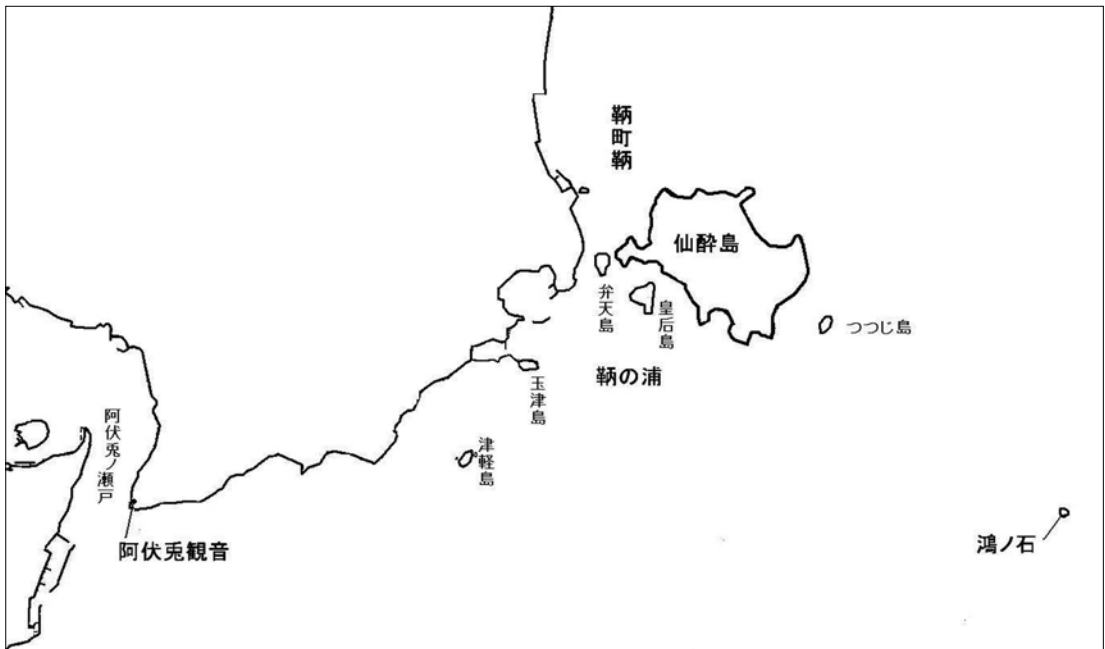
【表1】をもとに作成。?は不明。1日は通過（宿泊無し）。

の入江に船を入れた。そこには私が見た日本の庶民の家のうちではよい方の、立派な住宅や蔵が長い列をなしてびっしりと並んでいた。山の三分の一は耕地で、残りは険しく、すっかり藪に覆われていた。その山の麓には美しく照り映える堂や尼寺があった。夜ふけて順風が吹き始めたので錨を上げ、日の出前に岩城村の港で再び錨を落とした。（後略）

ケンペルは鞆には上陸していないので、恐らく船上から観察して記したのであろう。史料からは、

鞆の港や町を往路の際よりも近くから眺めた様子が窺える。

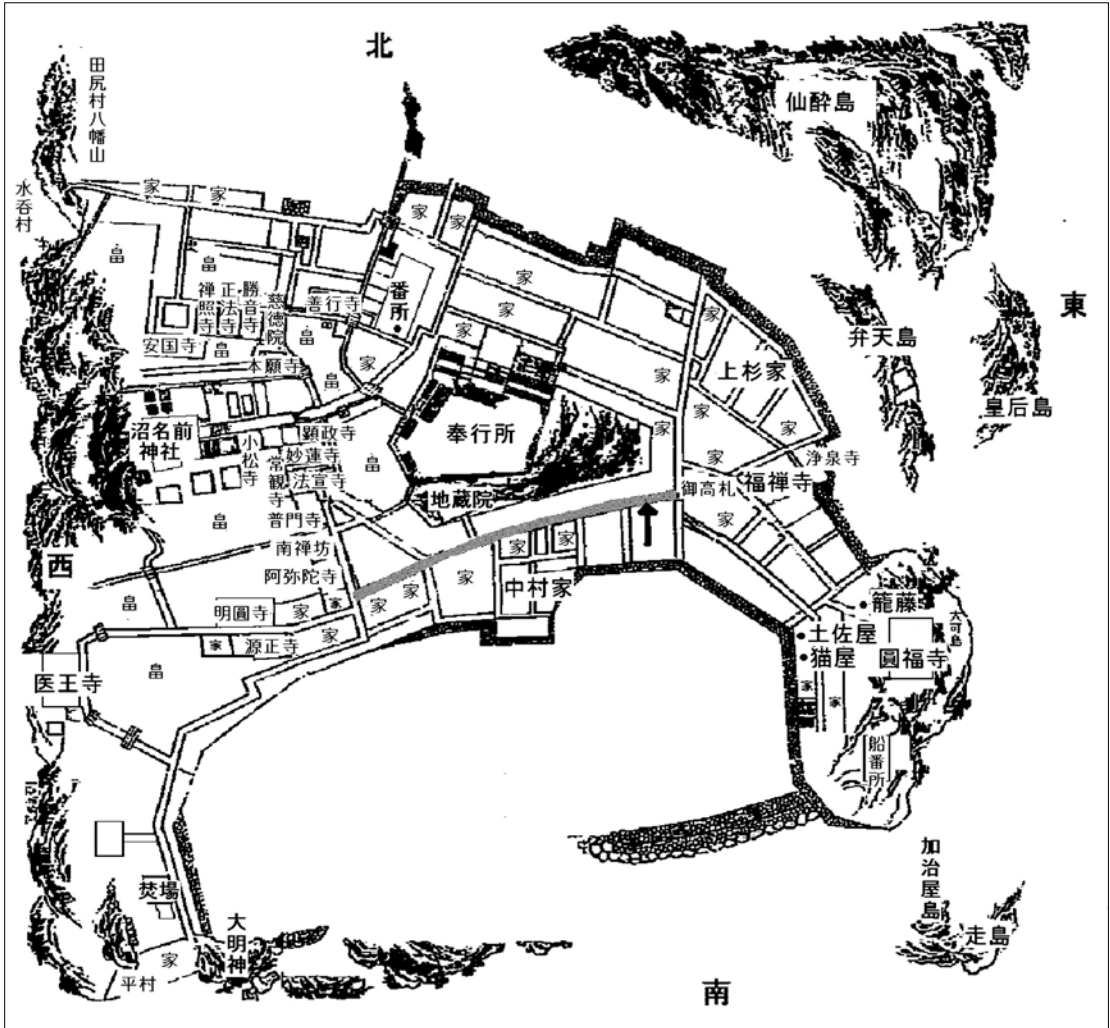
さて、【第3図】は文化年間頃の鞆の町並である。元禄年間には港の南側に波止場はまだ存在していないが、それを除くと町並はほぼ変わっていない。ケンペルが「幾つかの寺のある険しい丘」としているのは、恐らく、医王寺、地藏院、福禅寺、そして圓福寺のことであると考えられる。これらの寺は現在も同じ場所にあり、南の海側から鞆の町を見渡すと、それぞれが小高い丘の上にあってひ



【第2図】鞆の浦関係略図

【第3表】オランダ商館長の江戸参府と鞆の浦

西暦	和暦	抄録	往/復	商館長	史料	頁
16350303	寛永12年0114	鞆を通過。	往路	ニコラース・クーケ	東京大学史料編纂所編『オランダ商館長日記』（日本海外関係史料）	68
16350724	寛永12年0611	鞆、蒲刈を通過。	復路	バツケル	訳文編之1下、東京大学、1976	134
16380408	寛永15年0224	鞆に滞留。	往路	ニコラース・クーケ	『オランダ商館長日記』訳文編之3上、1977	182
16411220	寛永18年1118	鞆に碇泊。	往路	ヤン・ファン・エル	『オランダ商館長日記』訳文編之6、1987	27
16420226	寛永19年0227	鞆に到着。	復路	セラック		82
16421203	寛永19年1012	鞆を通過。	往路	ピーテル・アントニスセン・オーフルトワーヘル	『オランダ商館長日記』訳文編之7、1991	11
16431115	寛永20年1004	備後の鞆に投錨、後に出発、	往路	ヤン・ファン・エルセラック	『オランダ商館長日記』訳文編之8上、1995	5
16440115	寛永20年1206	鞆に投錨。	復路			103
16461211	正保3年1105	鞆を通過。鞆の周辺。	往路	ウィレム・フルス	『オランダ商館長日記』訳文編之10、2005	57
16470218	正保4年0114	鞆まで進む。	復路	テーヘン		138
16910221	元禄4年0124	鞆の様子。	往路	ハンドリック・ファン・バイテンハム	東京大学史料編纂所写真帳7598-2-62	62
		鞆の様子。		エンゲルベルト・ケンペル（商館医）	エンゲルベルト・ケンペル著・斎藤信訳『江戸参府旅行記』平凡社、1977年	103-105
16910425	元禄4年0327	鞆に投錨。	復路	ハンドリック・ファン・バイテンハム	東京大学史料編纂所写真帳7598-2-62	
		鞆の様子。		エンゲルベルト・ケンペル（商館医）	『江戸参府旅行記』	234-235
17440519	延享元年0408	鞆を通過。	復路	ダフィット・ブルーワー	東京大学史料編纂所写真帳7598-2-196/197/198	
17740514	安永3年0404	船の座礁と鞆への滞在。	復路	アレント・ウィレム・フェイト	東京大学史料編纂所写真帳7598-7-28/29	
17740515-19	安永3年0405-09	鞆に滞在。				
17940425	寛政6年0326	鞆に入港？	往路	メーステル・ヘイスベルト・ヘンマイ	東京大学史料編纂所写真帳7598-7-98/99	
17940426	寛政6年0327	(鞆を)出港？				
18140320	文化11年0129	鞆まで曳航される。	往路	ハンドリック・ドゥーフ	日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』六、雄松堂出版、1995	18-19
18180306	文化15年0130	鞆のリキユール酒。	復路(家室)	ヤン・コック・プロムホフ	日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、雄松堂出版、1996	54
18180311	文化15年0205	鞆に投錨。上陸。	復路			57
18220225	文政5年閏0104	鞆を通過。	往路	ヤン・コック・プロムホフ	日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』九、雄松堂出版、1998	286
18260305	文政9年0127	鞆へ	往路	ヨハン・ウィルヘルム・ド・スチュレル	東京大学史料編纂所写真帳7598-75-43/44	
18260305	文政9年0127	鞆の様子。		フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（商館医）	フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著・斎藤信訳『江戸参府紀行』平凡社、1967年	119-120
18260306	文政9年0128	鞆での碇泊について。	復路	ヨハン・ウィルヘルム・ド・スチュレル	東京大学史料編纂所写真帳7598-75-43/44	
18260622-23	文政9年0517-18	鞆に投錨。上陸。		フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（商館医）	『江戸参府紀行』	250
18260623	文政9年0518	鞆の様子。				
18260624	文政9年0519	鞆を出港。		ヨハン・ウィルヘルム・ド・スチュレル	東京大学史料編纂所写真帳7598-75-43/44	



【第3図】鞆の町並

福山市鞆の浦歴史民俗資料館編『鞆の町並と商家の賑わい～シーボルトも称賛～』
特別展鞆まるごと博物館展示図録資料編、2007年所収「文化絵図」をもとに作成。

ときわ目立っている。

(2) 安永三年（1774）の滞在

安永三年は商館長フェイト一行が参府の復路において、鞆に数日間滞在している。「中村家日記」⁽¹²⁾によると、

四月四日申刻頃帰帆之阿蘭陀人甲石二而難船
いたし大二及混雑、阿蘭陀人当津江上陸土佐
屋甚左衛門方江同八日迄止宿船作事等致シ、

同九日卯上刻出帆

と四月四日の申の刻に甲石で遭難し、動きがとれなくなり、鞆の浦に上陸している。そして、八日まで土佐屋甚左衛門のところに宿泊して、船の修理を行い四月九日卯の上刻（午前6時頃）出帆している。

ここでいう甲石は現在の鴻ノ石に比定され、鞆の港から南東へ4.5kmほど離れた場所にある（【第2図】参照）⁽¹³⁾。

また、商館長フェイトが記した業務日誌である「商館長日記」1774年5月14日（安永三年四月四日）条をみると、次のように記されている。

（前略）船長が私に夜に航行するのは危険であろうということ、艀の港に投錨する予定であると話した後、私たちは4時に出帆した。5時半に私たちは岩にぶつかり、そして私たちのバルク船は浸水した。私たちは他の船からの援助を得ようとしたが、しかし役に立たなかった。バルク船を浮かばせておくために、全力を尽くして私たちは水をくみ出さなければならなかった。ついに私たちは艀の港に到着した（備後国領内にある）。バルク船は水をくみ出すために浜に引き上げられた。直ぐ後に私は4つの穴があることを知らされた。私たちはここに8時15分まで滞在したが、その間に宿が私たちのために捜された。私たちが通った通りの家々の正面に提灯がともされていた。オランダ人がこの町を訪れて以来33年になる。私は出島に手紙を書いた。バルク船は可能な限り早く荷下ろしされている。

これによると、午後5時半に岩（鴻ノ石）にぶつかり遭難し、それから艀の港に到着して、午後8時15分までの間3時間弱のうちに、宿が決定されている。その宿は当時本陣を務めていた土佐屋であったことが先の「中村家日記」の記録からわかる。

また、艀への上陸が約33年ぶりであり、加えて遭難という緊急事態にもかかわらず、この時には順調に宿の手配が行われている点が窺える。

(3) 文政九年（1826）の寄港

(i) 往路

文政九年の参府では復路において艀に寄港しているが、往路に通過した際には以下のように記されている⁽¹⁴⁾。

正月参府阿蘭陀人乗船日吉丸沖合通船致候、尤御纏御役人等船廿七日夜五ツ半時入津候

ハ、出航之積之処、風並悪敷雨天夜二相成候二付、当家浜近く泊船、夜七ツ時分出船被致申候

と一月二七日夜五ツ半時から七ツまで、中村家の浜近くに滞船したことがわかる。

また、商館長に随行した医師シーボルトは1826年3月5日（文政九年一月二七日）付⁽¹⁵⁾で、

今朝早く備後領の南端の阿伏兎岬を通過した。岬の上には観音を祭った盤台寺があり、カイチョウ山の麓の岩の上に建っている。燈台に似た寺の塔が遠くから見える。寺と阿伏兎の村はその近くの湾内にあり、樹木のはえていない花崗岩の山に取り囲まれている。船乗りや旅行者はここで仏前に供え物をそなえ仏の加護を願うのが常で、供え物は普通一二の小銭（ひとつを一月分として一年分に当たる）で、信者はそれを小さい板切れに結んで経文を唱えながら海中に投げる。このおびただしい供え物を僧侶が雇っている漁師が拾い上げるのである。

と、阿伏兎観音⁽¹⁶⁾についてケンペル同様、詳細に記述している。シーボルトは随所でケンペルや他の人の記録を参照しており、艀に関する程度程度の予備知識を以て見ていたことは容易に想像できる。

(ii) 復路

(a) 寄港と宿決定をめぐる動き

商館長一行の復路での上陸にあたって、艀の町内での宿決定をめぐる一連の動きを文政九年五月十七日の「中村家日記」⁽¹⁷⁾から引用する。

参府阿蘭陀人帰路乗船日吉丸、十七日夜九ツ時分、仙酔嶋東沖迄罷下り候二付、当所漕船手筈漸暁七ツ半時二相揃お迎^(ママ)二付、七ツ時分湊へ漕入申候上、①月番宿老三三郎・同町代庄三郎御本船へ御用伺二参り候処、役人被申者阿蘭陀人并二御纏御役人休足二揚り度被申候間、宿之義并二風呂焼呉候様被申二付、②

月番宿老方御本陣上杉氏・当家両家之内二宿可致申来候処、両家共種々相談致候へ共、何分蘭人者賤キ者二候へ者、御本陣二者相対り不申哉与申合一向評決不致候二付、火急之義二候へ者月番宿老宿之義何連にも可申哉与御差図被成下度候、③御番所へ被相伺処、④小頭水野上小源二様御病氣二付、地目附刀嶋与兵衛様御奉行所へ御伺被成候処、⑤御本陣相当り可申由被仰付候、⑥右之趣八三郎方申越候内、不意阿蘭陀人御總御役人揚陸被致候二付、大昆雜御本陣手筈も無之候へ者、八三郎御番所へ被罷出本陣何連共不相定内、不意蘭人相揚候間、⑦無抛此度之義私引受御宿可仕段被申達、早速手筈被致申候、⑧急二土佐屋を御役人見分二被成、壱ヶ所斗にて者相済不申由被申候付、御検役御宿者猫屋仰出候裏門二階二相動申候御検役上下五人・大通詞壱人・小通詞壱人ヅ七人御賄御願候付、手筈被致候事蘭人遊女見物致、宿屋籠藤へ参遊女二人呼候事、外科蘭人山々を見物致之草木或者石を拾取候事、寺々町内を見物致事、通筋之事事当町仕構手筈数々有之候へ共繁故略之

蘭人名面

カヒタン

ヨハン。ウィル。ヘルムテ。ステュルレル

歳五十二

役人

ヘンテレキ。ヒュルヘル 同廿弐

外科

ヒイソル。ヒリツ。ふランスハン。シイホルト 同廿四

ヅ

蘭人付添役人名面略之

右十八日夜、⑨本船日吉丸方御本陣へ金子百疋御検使様・大通詞小通詞上下七人御賄料与して式朱壱厘、御検使様風呂料銀壱両被下置候、⑩談取書月番宿老方御差出申し候、十八

日夜八時半時分日吉丸無滞出帆致申し候

一方で、商館長スチュルレルと、シーボルトはそれぞれ以下のように記している。

拙訳：本日、鞆の港の前まで来て、そこで投錨し、それから（6月22日）私たちは鞆の港内に曳航され、そして午前7時半に港内に投錨した。そして3人とも上陸し、終日過ごした（6月23日）

と商館長は非常に簡潔に書き記している⁽¹⁸⁾。これに対し、シーボルトは『江戸参府紀行』⁽¹⁹⁾の中で、

朝、引き舟に引かれて鞆のみなどにはいる。正午ごろ上陸。大変きれいな町並みで、船の出入りがあり活気にあふれた町である。（中略）夕方船にもどり、夜半に三〇隻の引き舟で港外に出る。

文政九年五月十七日（1826年6月22日）九つ時（午後12時頃）に商館長らに乗せた日吉丸が仙酔島東沖へ停泊する。翌十八日（6月23日）暁七時半（午前5時頃）に鞆側で漕ぎ船の準備が整い、「七ツ」（午前4時頃）⁽²⁰⁾に港へ船を漕ぎ入れ、商館長一行によると午前7時頃に港内に投錨した。そして終日過ごした後、夕方には船に戻り、夜八時半（午前3時頃）に出帆している。

この間について、宿決めに注目しながら鞆の町内と商館長一行の動きをまとめていくことにする。

まず①月番宿老の土佐屋八三郎が町代庄五郎を伴って本船へ伺いに行き、宿、風呂、休息を要請される。②八三郎は本陣を務めていた上杉家、中村家に宿などの件を打診する。しかしながら両家の話し合いでは「何分蘭人者賤キ者」であるため本陣に相当しないとの結論に達している。このことを受けて、③八三郎が宿をどこに決定すべきかを番所へ問い合わせに行っている。番所では当時病身であった小頭水野上小源二の代わりに地目附刀嶋与兵衛が鞆奉行所へ伺っている（④）。そして奉行所による決定は傍線部⑤「御本陣相当」とのことであった。この旨、番所から申渡がある

ものの、⑥宿が決定していない。そうしている内に、「不意阿蘭陀人御纏御役人揚陸被致候」と、オランダ人が鞆に上陸している。これは正午頃の出来事である。⑦「無抛此度之義私引受御宿可仕段被申達」と「私」八三郎に宿を受け入れるように達しがあった。この達しにより役人が突然、土佐屋を見分し、一ヶ所だけでは不十分だとして、「御検役」たちのための宿が猫屋に決定されている。

この後、商館長一行は籠藤にて遊女見物をしている。彼らが船に戻った後、夜に日吉丸から本陣へ賄料として二朱一厘、風呂料銀一両下され、代金支払いが行われた(⑧)。談取書は月番宿老から提出されている(⑨)。

さて、宿決定までをもう一度確認しよう。

はじめに本船から御用を伺った月番宿老、土佐屋八三郎が本陣(上杉家、中村家)に掛け合っている。しかし、その時に宿が決定しなかったため、八三郎は番所へ行き問い合わせを行っている。そこで、番所の役人が奉行所へ赴き、宿は本陣に相当する旨を決定している。ところが、宿が決まらぬうちに商館長らが上陸したため、宿が月番宿老八三郎に決定され、手筈を整えるように申渡されている、そして役人が土佐屋を見分し、付添の役人たちのための宿(猫屋)が探されている。

オランダ商館長一行は町方の責任において接待され⁽²¹⁾、月番宿老が宿の手配など、商館長一行と町側の調整役にあたっている。本来ならば、月番宿老が本陣に打診した時に宿が決定し、準備が整えられていたと考えられる。今回は本陣が申し入れに難色を示しており、このように調整がつかない場合には、番所を通して鞆奉行所へ伺いをたてて、奉行所の判断を仰ぐ形をとっている。つまり、鞆町内での折り合いをつける役目も加わっていたのである。

ところで、鞆の町の行政⁽²²⁾は鞆奉行の支配下にあり、七カ町(原町、鍛冶町、石井町、関町、道越町、西町、江浦町)の町ごとに宿老1名、月

行司1名、町代1名を置いており、各町宿老から月番宿老が出されていた。文政九年当時、鞆奉行は井上久須見が、土佐屋は道越町宿老、大坂屋は関町宿老、中村家(保命酒屋)は西町宿老を務めている。ただ、商館長一行が来鞆した頃には西町宿老は父吉兵衛から関町宿老上杉平左衛門兼帯となっており、その後弟敏造が西町宿老に就任している⁽²³⁾。この一件で土佐屋に宿を命じられたのは、彼が月番宿老であったから、というよりむしろ本陣の一つであったことによると思われる。

(b) 上杉・中村両家の対応の背景

上杉・中村両家のオランダ人寄港一件で示した態度の背景について同じく外国人寄港の例である漂着民回航の際の取り扱いから考察していくことにしたい。以下は文政九年三月二九日付の「中村家日記」⁽²⁴⁾である。

一若風波二而異国人揚陸之節者用意宿圓福寺・南禅坊へ申付置候間、揚陸より右宿迄道案内之者式人宛可指事
一異国人御纏御役人若揚陸も有之候事も難計用意宿之事

本家	大坂屋
	保命酒屋
	土佐屋
下宿	祢こ屋
	伊九老
	高松屋
	仁左衛門

右者町役所二而申談候先例有之二付て月番宿老方申渡候

右之外異国人通船二付被仰出候事数々有之候得共略之

これは、異国人(漂着民)が長崎護送の途中に鞆の港に立ち寄り、上陸する場合を想定して記されており、異国人は圓福寺、南禅坊を宿として提供し、揚陸場所から宿まで道案内の者2人ずつを出すことになっている。また、御纏御役人は本陣

である、本家大坂屋（上杉家）、保命酒屋（中村家）、土佐屋、及び「下宿」衾こ屋（猫屋）、高松屋に宿泊させる旨が記されている。この件は文政九年四月十日に「異国人通船無滞相済」⁽²⁵⁾と鞆には寄港せずに到着している。

ここから2つの点を指摘しておきたい。一点目は港町として、漂着民も寄港する可能性があり、そのため受入体制を整え、万が一の場合には滞りなくその体制を機能させる必要があった点である。

二点目は同年五月にオランダ商館長たちが来鞆した時、宿決定のために本家大坂屋、保命酒屋、土佐屋、猫屋の順で打診が行われている点である。ここに記されているのは単に本陣や下宿ではなく、鞆町内での彼らの勢力図を示していたと思われる。

以上のように、外国人の受け入れの際にはことを順調に進めなければならず、上杉・中村両家は単に「何分蘭人者賤キ者」という理由のみで商館長一行の受け入れに難色を示したとは考えにくい。

では彼らの対応の背景には何があったのか。

一つは先の申渡が商館長スチュルレル一行が鞆に寄港するわずか一月半前の文政九年三月末であり、異国人（漂着民）は町内の寺へ、そして御纏役人は本陣へ、というこの申渡と同様の方針を上杉・中村両家は踏襲しようとしたのではないかと考えられる。実際、5年前の文政四年（1821）三月二三日には紀州熊野に漂着した異国船を長崎へ移送する際に、鞆へ入津し、御纏役人たちは本陣である中村家の隠居所（朝宗亭）にて暫く休息し、同家では「家製名酒」を差し出している⁽²⁶⁾。このような先例もあり、上杉・中村両家がオランダ人の止宿を渋った背景の一つとなったと考えられる。

もう一つはその規模にあると思われる。それぞれの外国人使節の規模を比較すると朝鮮通信使が700-800人（通信使400-500人、案内役や対馬宗氏一行300人ほど）、琉球使節が100人前後と島津氏一行であったのに対し、オランダ商館長一行は商館長ら3名（かつては4名）と付添役人で、

全体でも60人ほどの規模であったという⁽²⁷⁾。そして実際に上陸して宿で休息する人数となると、文政九年の例では商館長ら3名と付添役人7名の計10名であった。彼らをもてなす手間と本陣への実入りといったように、聊か現実的な問題もあったのではと考えられるが、数値的な裏付けを得られないため、実際のところは分からない。

さらに、「諸国は勿論阿蘭陀人・琉球人江も銘酒売弘メ」⁽²⁸⁾（文化十年〈1813〉、十二月）、「ことに蘭人・琉球人など入津之節も数多買入に相成候儀も度々有之、近来は対馬・長崎の筋より少々ツ、異国人之注文も有之」⁽²⁹⁾（弘化五年〈1848〉、四月）中村家の顧客としての外国人に対しては特に抵抗があるようには見受けられない。

(c) シーボルトの行動と町並の観察

以下では、先の史料で「外科蘭人山々を見物致之草木或者石を拾取候事、寺々町内を見物致」と述べられているシーボルトの鞆町内での行動と町並の観察の記録を紹介することにしたい⁽³⁰⁾。

われわれは何軒かの家を訪ねたが、心から迎えてくれた。ある寺へも行ったが、その場所は美しさとひらけた眺望で有名であったし、また遭難して日本の海岸に吹き流された朝鮮人が滞在していたところとしても少なからず有名であった。私は町の郊外にある医王寺に出かけた。数百フィートの険しい山を登ると、その山の背に寺がある。この山の植物群はカシ・コナラ・マツ・クリ・エノキ・イヌヒバ・ツツジ・グミ・ハゼ・タケ・クズなどで、他の樹木とからみ合っている。ハゼの上でコフキコガネ〔昆虫の名〕を見付けた。大きさや形態は全くわれわれの国のものと似ているが、甲と腹部の色が異なっている。これが原種なのか、それとも気候や食物がこういう変化をもたらしたのか。

町郊外の小高い丘にある医王寺に行き、寺の背

面にある山を登って、植物・昆虫の観察を行っている。また、美しさと眺望や漂着した朝鮮人が滞在したことで有名な「ある寺」については福禅寺か円福寺の二寺院が考えられる。これらの寺は鞆の東側の海に面しており、手前に仙酔島を臨む。そのうち、福禅寺は朝鮮通信使の正使が滞在した場所である。その客殿である対潮楼からは朝鮮通信使から「日東第一形勝」と評され、また頼山陽や広瀬旭荘などからも賞賛された眺望を楽しむことができる⁽³¹⁾。

先に述べたように漂着民を長崎へ回航するにあたって、鞆に寄港することがあり、その際に漂着民の宿坊とされていた一つが圓福寺である。同寺は商館長一行が遊女を見物するために訪れた籠藤から目と鼻の先にある。この寺の裏手に回ると福禅寺同様の仙酔島の絶景を臨むことができる。

前者であるなら彼の若干の勘違いもあったと思われるが、何れにしろ対岸に仙酔島が見える風景を見ていたことはいえるであろう。

また、シーボルトは鞆の町の様子を以下のように書き記している。

たくさんの小売店があるが、大部分は船員用の品物や蓆・綱・帽子・草鞋などの藁製品である。東北の側にある港は、概して小さい日本の船には都合のよい停泊地で、北側にはたいへん頑丈な堤防、西南の側は町と高い山があつて港を守っている。港外は三尋の深さであるが、港内はもっと浅く、私の考えではヨーロッパの船は入港できない。けれども約半マイル離れた所に同じような好条件で錨を降ろすことができる、町の長さは一五町で手入れの行き届いた住居は裕福なことを物語っており、住民は数千に上るようである。

ここで触れられているたくさんの小売店がある通りは鞆の東西（土佐屋側と医王寺の方面）を通る【第3図】に書き入れた矢印部分と思われる。

もちろん、このような町並の記録は鞆に限らず、

シーボルトは各停泊地や実際に上陸した町について、見物した場所や時に機器を用いて観測したデータなど、彼の興味関心に即して様々な事項を書き残している⁽³²⁾。

おわりに

参府の記録の中で、鞆の町の様子を知りうるものは少ないが、ケンペルやシーボルトは詳細に港や町並み、寺院について記している。また、彼らの記述からは宿について特に気にしている様子は見られない。

鞆は港町として、外国人使節や漂着民護送船が寄港する可能性があり、それに伴う受け入れ体制が整備されていたと考えられる。オランダ商館長一行の鞆への寄港に伴う宿は、安永三年（1774）の事例では船の遭難という緊急事態にもかかわらず、特に大きな問題もなく決定されている。一方で、文政九年（1826）の一件は宿決定までの手続きを通して、鞆の町の指揮系統の一端を露呈することになった。すなわち、商館長一行の鞆での宿は本来なら月番宿老が本陣に掛け合い決定されていたが、そうでない場合には番所を通じて鞆奉行所へ伺いをたてることになっていた。

最後に文政九年の鞆の寄港一件から浮かび上がる課題を2点提示しておきたい。一つは宿所の決定や接待の際の町役人らの行動に見られる商館長らの受け入れ体制（宿舎の決定、接待の際の町役人らの動き）と朝鮮通信使や琉球使節、諸大名の寄港時の体制との共通点、相違点である。

二点目は商館長らの宿を決定する際の本陣上杉・中村両家が示した態度と両家の鞆町内における影響力の大きさである。先に両家が「蘭人者賤キ者」とした背景について見通しを述べた。ただ、月番宿老による打診と鞆奉行所からの判断があつたにもかかわらず、上杉家・中村家の意向が尊重された形となっている点は鞆町内の構造を今後検討していくうえでも注目されると考えている。

注

- (1) 福山市史編纂会編『福山市史』中巻、1968年。
- (2) 福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会編「朝鮮通信使と福山藩・鞆の津」その1（慶長一天和）、その2（正徳一文化度）、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2003-2004年。および青野春水他編「鞆の津中村家文書目録」1-4、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2006-2009年。福山市鞆の浦歴史民俗資料館編『知られざる琉球使節～国際都市鞆の浦～』2006年、福山市鞆の浦歴史民俗資料館編『鞆の町並と商家の賑わい～シーボルトも称賛～』特別展鞆まるごと博物館展示図録資料編、2007年。
- (3) 姜在彦『朝鮮通信使が見た日本』明石書店、2002年。辛基秀『朝鮮通信使の旅日記』PHP新書、2002年。佐竹昭「近世瀬戸内一海村における“国際経験”」（岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003年）、『福山市史』中巻、665-666頁。
- (4) 福山市教育委員会編『鞆の町並』1974年。
- (5) 『福山市史』中巻、670頁。横山學「琉球国使節の往来」（福山市鞆の浦歴史民俗資料館編『知られざる琉球使節～国際都市鞆の浦～』2006年）。
- (6) 『中村家日記』（原田伴彦編『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、文彩社、1976年、390頁。）
- (7) 『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、402頁）。
- (8) 史学会編『東西交渉史論』上巻、東京大学出版会、1939年。金井圓『日蘭交渉史の研究』思文閣出版、1986年。片桐一男「オランダ商館長とシーボルトの江戸参府」（石山禎一他編『新シーボルト研究』Ⅱ、社会・文化・芸術編、八坂書房、2003年）、同「カピタンの江戸参府と鞆」（福山市鞆の浦歴史民俗資料館編『鞆の町並と商家の賑わい～シーボルトも称賛～』特別展鞆まるごと博物館展示図録資料編、2007年）。
- (9) 織田毅「『江戸行一件書留』について」（福山市鞆の浦歴史民俗資料館編『鞆の町並と商家の賑わい～シーボルトも称賛～』特別展鞆まるごと博物館展示図録資料編、2007年）。
- (10) エンゲルベルト・ケンペル著・斎藤信訳『江戸参府旅行記』平凡社、1977年、103-105頁。
- (11) 『江戸参府旅行記』234-235頁。
- (12) 「中村家日記」自宝暦十一年至安永八年（福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
- (13) 海図に示される「島」は「国連海洋法条約第121条」によると、自然に形成された陸地であって、水に囲まれ高潮時、すなわち満潮が頂点に達した時においても水面上にあるものであり、鴻ノ石は満潮時には海面に隠れる、「島未満」の場所といえよう。鴻ノ石には現在、灯台が設置されている（現在の標高は7.6m）。なお、1774年5月14日当日の潮汐推算（福山）によると、潮高は17時112cm、18時65cmとなっていた。
- (14) 「中村家日記」（文政九年一月二七日～、福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託文書）
- (15) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著・斎藤信訳『江戸参府紀行』平凡社、1967年、119-120頁。
- (16) なお阿伏兎地方には、文化元年（1804）五代藩主阿部正精、文政九年（1826）六代藩主阿部正寧が鞆巡検で訪れており、広義には鞆に含めて考えるべきだと指摘されている（神田由築「近世鞆の浦をめぐる流通と社会構造」『歴史科学』第194号、2008年）。
- (17) 「中村家日記」文政九年（福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
- (18) 「商館長日記」1826年6月22日、23日条（東京大学史料編纂所写真帳7598-75-43・44）。
- (19) 『江戸参府紀行』250頁。
- (20) 時間的に矛盾が生じるため、「六つ」（午前6時頃）の誤りかと思われる。
- (21) 『福山市史』中巻、672頁。
- (22) 『福山市史』中巻、70頁。
- (23) 『中村家日記』文政九年（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、469-470頁）。
- (24) 「中村家日記」文政九年（福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
- (25) 「中村家日記」文政九年（福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託文書）。及び『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、470頁）。
- (26) 「中村家日記」文政四年（福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託文書）。
- (27) 片桐一男「オランダ商館長とシーボルトの江戸参府」。同「カピタンの江戸参府と鞆」。
- (28) 『中村家日記』文化十年、十二月（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、436頁）。
- (29) 『中村家日記』弘化五年、四月（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、26頁）。
- (30) 『江戸参府紀行』250頁。
- (31) 『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、481頁）。
- (32) 例えば下関滞在の記述などが挙げられる（『江戸参府紀行』90-91頁）。

Note